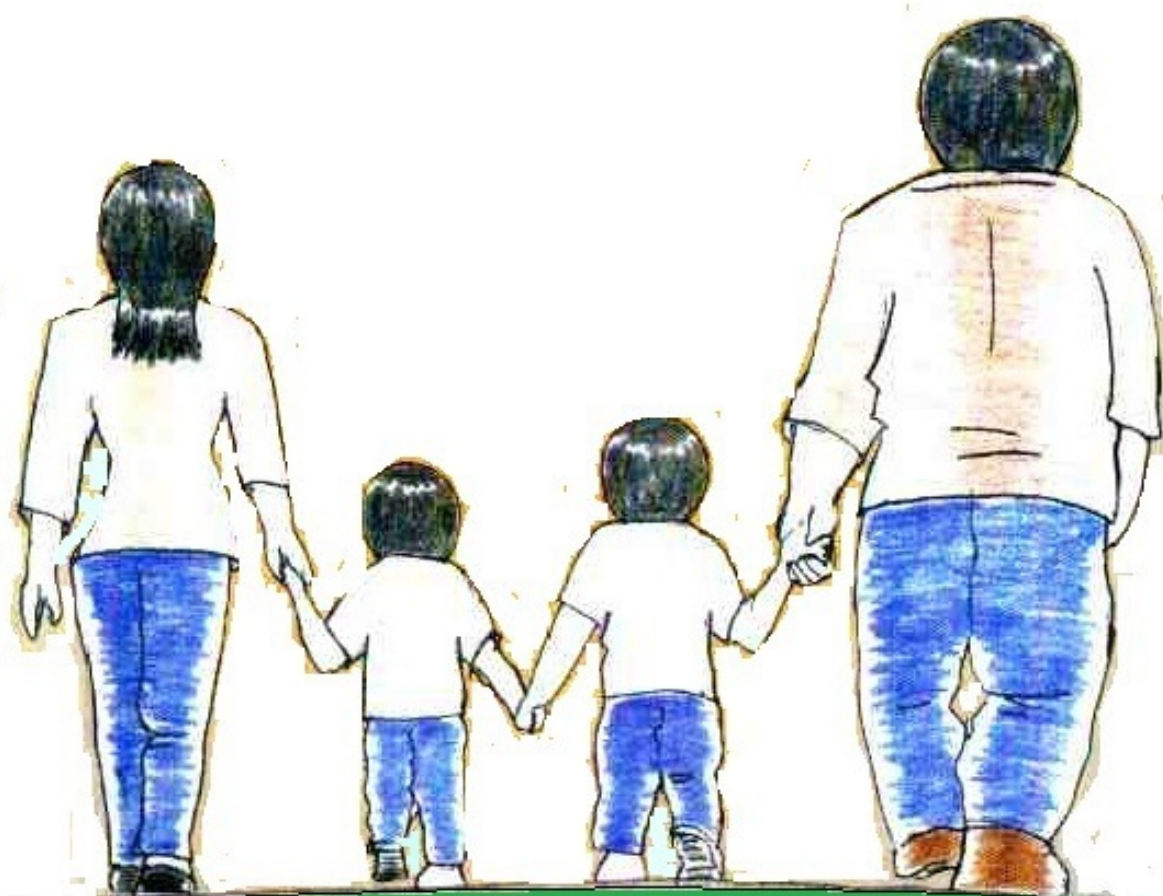


ニコニコ家族

ドライブ編



大八

はじめに

はじめに

このお話は小説と言えるかどうかわかりません。大した制限もないまま自由に書き上げてしまいました。出版社の方が「小説に四コマ漫画ですか？・・・斬新ですね」。あまり深く物を考えない私は専門家たちの言葉をスルーしました。

読書家とも言えない私は活字より映像の方が好きで（幼稚か）、主人公のはずのニコニコ家族は映像で言うと後ろ姿とか手元しか映りません。ニコニコ家族の詳細は最小限にとどめております。勝手に映画化しておりますが・・・。

ニコニコ家族四人の名前はお話の中で徐々に明らかになっていきます。年齢や出身地までは書いておりません。主人公の詳細がわからないなんて斬新どころか邪道ですね。よく刊行できたものです。

このニコニコ家族が勝手に猛進して行ったおかげで、知らないあいだにお話が出来上がっていました。

あまり本に馴染みのない方でもスピーディーに読めるような仕上がりになっております。っと言うより難かしく書けなかっただけの話です。それでも何か口元が緩んでしまうような気分になってくれれば幸いです。

ニコニコ家族からのお願いです。

携帯電話の電源をお切りください。

お手荷物は膝上に抱えるか、足元においてご鑑賞ください。

具合が悪くなったり、イラツときは速やかに目を閉じて休憩してください。

どうか皆様、温かい目でご鑑賞ください。

それでは「ニコニコ家族」の上映です。

「ビィ〜〜」

季節は秋。 楽しく会話をしている家族連れがファミリーカーでドライブ。都心から北へ遠く離れた有名な温泉街へ向かって車を走らせていた。車内では人気ヒーローやアニメの曲が入ったカセットテープがスピーカーから流れている。天気がよく、運転手のお父さんも長期休暇が取れて気分がいい。助手席のお母さんは知らない地域の風景に目を取られ、ドライブを満喫している。後ろの席では二人の子どもたちが楽しそうにはしゃいでいた。自然と会話も弾み、笑顔の耐えないドライブだ。

この車の後ろには、少し気が短い青年がデートに向かうため車を走らせていた。車内で大好きなロックンロールが鳴り響き、否応なしに気持ちが高ぶっていく。彼は十九歳の板前見習い。高校を卒業すると、地元のお寿司屋さんに就職して日々の修行に専念していた。朝早くから夜遅くまで雑用に接客、限られた時間の中で寿司を握るための努力を体で覚えることに必死だ。週一の休日も兄弟子について、市場に行って材料の目利き、道具の手入れなど、彼にはやることばかりで休んでいる暇がなかった。

そんな中、彼が見習いになって半年が過ぎた頃。連休明けでお店の仕事もひと段落して落ち着いたこともあり、親方から一日休みをもらうことができた。彼は久々の休みに心が踊った。ところが前夜、久しく会っていない彼女とのデートを前に気持ちが高ぶってしまい、なかなか寝付くことができず朝寝坊をしてしまった。デートの待ち合わせ場所に向かって走らせてはいたが、自然とアクセルが深くなってしまい、イライラが募っていく。

「ちょっと。・・・前の車遅くねー？」

急いでいることもあり、前の車のスピードがやたら遅く感じた。時計を見るともうすぐ約束の時間。彼は、いくつかの抜け道を知っているのだから、道を変えて行こうと思い脇道に入って行った。地元ではかなり道に詳しく、走りなれている様子。

「少し時間を稼がなくては・・・。この前のこともあるし・・・。二度目はない」

彼には学生の頃から付き合っていた同い年の彼女がいる。二人は付き合ってもう三年ほど経つ。彼女は地元の短大に進学して、キャンパスライフを楽しんでいた。大学にも慣れて、最近物足りなさを感じてきていた彼女は少しわがままになってきていた。そんな彼女はまた時間にも厳しい。

今から一ヶ月ほど前のことである。お店が休みの時の兄弟子との仕事の雑用を終わらせてから、すぐに彼女と待ち合わせ場所に向かったが、二・三分遅れただけなのに理由も聞かず、いきなり無言で帰り始める始末。ここ最近やっと思嫌が直ってきて、あの時以来のデートなのに、また怒らせてしまうことはどうしても避けたいと思っていた。

彼は地元の人でも知らないような抜け道を、ここぞとばかりに軽快なハンドルさばきで距離を縮めていく。信号機のない道をあえて選んで細い道を注意深く走らせていく。

「この道を抜けて、大通りを右に曲がれば・・・OK」

彼は脇道から大通りに出るところで一旦停止し、行きかういくつかの車のタイミングを見計らってから本通りに出た。彼は稼いだはずの時間に少し『ほっ』として何気なく前の車を見ると、見覚えのある車に違和感を感じた。

「あれ。この車・・・さっきのか？」

ナンバーを見ると他県の46-49。間違いなくニコニコファミリーカーだ。

「何で？・・・何でそこにいる・・・ヨロシク！（46-49）」（怒）

後ろのガラス越しには二人の子どもたちが何かを歌っているようにリズムカルな動きで横に揺れている。

「楽しいそうですね！ ヨロシク！」（怒）

この少し気が短い彼の後ろを走っている車には喧嘩中の二十代後半の夫婦が乗っていた。車内ではFMラジオがつけてあり、運転手の主人は無言で運転している。助手席では横ばかり向いている妻が乗っていて、二人で開店したばかりのデパートへ向かう途中だった。喧嘩の原因はちょっとした会話の言い方によるもの。主人の言っていることに答えようとしている妻の返答が的を得ていないことに対して、たしなめようとした主人の言い方が気に入らなかったようだ。妻の一点を見つめている様な態度に、主人は運転していても心地よさを感じることができず、その場で大声を張り上げたい心境になっていた。

そんな主人は何気なく前を走っている彼の運転の様子が少し変であることに気づいた。前かがみになったり、急に座席にもたれたり、頭をかきむしったりしているのが見て取れる。主人は後ろのガラス越しに見える彼の仕草からイラついていることを理解して、自然と口元が緩んでいく。

(あいつ、あせってるなあ。前が遅いんじゃない?)

前の車を運転している彼の様子が面白くて思わずニヤついてしまった。となりで不機嫌なまま口を閉ざしていた妻がニヤ付いている主人に気がついた。今朝の喧嘩のこともあり、彼女はついにためていた気持ちを吐き出した。

「何笑ってんの? あんた、私を馬鹿にしてるんでしょう?」

妻の性分は一度怒ると相手の話を聞かなくなってしまうことで、主人が一番恐れていることだ。

「ちがうよ。前の車が・・・」

主人が前の運転手のことを説明しようとしたが、もう聞き入れる様子がなく、たまっていた鬱憤が後をついで出てくる。

「あんたはいつもそう。人がまじめに話しているのにそうやってへらへら笑っているだけ。もう、うんざり」

「ちがうって。前の車が」

「前の車の話じゃないの。あんたの話なの」

この夫婦が乗った車の後ろの車にはスーツ姿のサラリーマン二人が乗っていた。助手席の上司は四十代半ばで部長にまで出世した会社ではかなりのやり手の男である。車を運転しているのは、新卒一年目の彼の部下。二人は大事な商談のため出張してきていたのだ。

この商談のため、上司は一ヶ月前から準備をして万全の体制で望んでいた。会社の存続がかかっている重要な仕事でもあり、自分の人生も大きく左右されることでもある。

だが、仕事は失敗してしまう。取引先とは破談が決まり、半ば追い出されるように先方を後にした。

今回のお粗末な仕事に責任を感じている助手席の部長と、あまり仕事の意味を理解していないノーマルな部下は帰り道を軽快に走らせていた。物静かな部長と浮かれ気分の部下が各々の雰囲気を出して社内は異様なムードになっている。

すると、その部長の携帯電話が鳴った。

「もしもし」

電話の相手は部長の上長で、今回の社運をかけた大事な出張のことについてだった。

「先ほど先方から連絡が入ったよ」

「あ、はい」

「商談は破棄なのかね」

「あ、いや、それですが、しばらく検討しなおすすめな……。前向きと言うか……」

「相手はあまりいい反応を見せなかったようだが……」

「いや……そんな感じでも……ない様で……」

「一体何があったのかね？」

「特別変わったこともなかったはず……なんですが……」

「……君の責任についてだが……」

携帯を握り締めている部長の額には汗がにじみ出て、今にも滴り落ちそうなほど大きくなっている。

そのころ先頭のファミリーカーは知らない土地に悪戦苦闘。

「この道でいいのかな？」

「ちょっと待って。今地図で確認するから」

そうやって助手席のお母さんが地図を取り出して確認し始める。

「もう少しくと大きい道に出ると思うよ。……あ、そこそこ、看板じゃない？」

「どこどこ……」

お父さんがお母さんの言葉にいちいち反応している後ろで、彼の車は大変なことになっていた。

「何フラフラしてんだよ。意味ねーとこでブレーキ踏むなよー」（怒）

彼はアクセルを踏み出してはすぐブレーキを踏み、またアクセルを踏むような運転になっていた。ガラス越しには相変わらずの子どもたちの笑顔が見て取れる。

「ほんとに楽しそうだな！ ヨロシク！」（怒）

そんな時、とうとう彼女から電話がかかってきてしまった。

彼は怖々ハンズフリーで電話に出た。

「もしもし」

「もしもし。何してるの？」

「いや、今行くところ」

「どこにいるの」

「いや、すぐそこ」

「だったら早く着なさいよ。もう時間になったわよ」

「うん。もうすぐだから。・・・チツ、ヨロシク」

「何？・・・なんか言った？」

「え。ううん、何も」

「チツって言った？」

「いや・・・前の車が」

「前の車がチツって言うの？あんたでしょ」

「・・・ハイ」

「やっぱり言ったんじゃない。私に何か言いたいよね」

「違うって。ごめん。もうすぐだから。・・・くそ。ヨロシク」

「何・・・。何それ。逆切れ？」

「ごめん。ちょっと・・・」

「格好つけてるの。どうゆうつもり。誰かいるのね？」

「違うって。・・・」

「よろしくって何？」

「いや、あの、前の車・・・」

「笑えないわ」（怒）

「いや・・・うん」（ここの信号短いよねえ。）

「いいかげんにしてくれない？」（怒）

「・・・ハイ」（行け。行け。早く。変わってしまう。）

「私帰るわよ」（怒）

「・・・ハイ」（行け、早く・・・ああ黄色・・・。ああブレーキ。）「チツ」

「チツって何？ねえ」（怒）

「いや・・・前の・・・」

「で・・・」（怒）

「・・・で・・・すから、・・・」

「帰るわよ」（怒）

「ちょっと待って。せっかく休みが取れたのに・・・」

彼はニコニコファミリーカーの後ろに付いていることでの焦りに加え、彼女の一方的な話し方に少しずつ不愉快な気持ちになっていった。

その後ろの夫婦の乗った車は相変わらずの状態が続いて、主人は運転しながら一生懸命前の車

を何度も何度も指差して説明していた。

「前だって。前の車を・・・」

「何よ。まだそんなこと言ってんの」

「違うって。聞けよ。人の話をー」

「聞かなくても分かるわよ！ 馬鹿にして笑ってたんでしょ！」

「だから違うって」

「ほんっつとにイヤ。そーゆーところ」

「・・・前・・・なんです」

その後ろでは電話を切ったばかりの部長が額の汗さえもぬぐわず、上長の言葉が頭の中を支配していた。今頃会社では今回の破談について会議を行っているはずである。そんなとき、隣で運転しているノ一天気な部下が、前の車の運転手がしきりに前方を何度も何度も指差していることに気が付いた。

(何だろうあの車？・・・前のほうで何かあったのかな？・・・事件？)

ノ一天気な彼は仕事での出張にあきはじめていて、何か面白いことがないか考えていたところだった。

「部長。何かあったのでしょうか？」

部下の言葉がなんとなく耳に留まった。

(お前、さっきの電話、聞こえていたのか？それとも、すでに裏で何か？)

部長は部下の言葉にこう思い、すかさず問いただした。

「何のことだ？」

「何か起こっているみたいですが」

「怒っているだと？」

「ええ。事件ですよこれは」

「当たり前だ。怒っているに決まっているだろ！ 事件なんだよこれは」

「え、ご存知なんですか？」

「・・・お前、何か知っているのか？」

「いえ、詳しいことはわかりませんが、大変な事件になっていることだけは分かります」

「どうしてそんなことが言える」

「いやあ、確認したわけじゃありませんが・・・前、何かやったんでしょうねえ」

「前？・・・いつのことだ？」

「だから詳しいことは分かりませんが・・・」

「前？何をやらかしたんだ？おい。教えてくれ」

部長は運転している部下の肩にしがみつき、何とか聞きだそうとした。

「前、何をしてしまったんだ？なあ、何でお前が知ってるんだ？」

(俺何かやったかなあ？こいつ誰から連絡をもらったんだ。)

「危ないですよ。部長。落ち着いてください」

(そこまでして知りて一ことか？)

部長はこの言葉で手を離すと、冷静に部下の話を書くことにした。

(多分何か隠している。絶対白状しないだろう。何か重要な手がかりを聞き出さないと・・・。)

「君はどこまで知っているのだね？」

「私は詳しく知りません。ただ・・・」

「ただ、どうした？」

「ただ、気づいたんです。何度も同じように指を・・・」

「指をどうした？」

「指を差していたんです」

「指を・・・」

「誰でもわかるように何度も同じ方向位を……。みんなわかりますよ。なにか起こっているって……」

「そうか……。指を……」

(私は指をさされていた。……。気づかなかった。思い出さなくては……。一体何を怒っていたのだ。)

部長は急に黙り込むと、過去の仕事の失敗をひとつひとつ思い出していた。

(えー、あれは確か、誤魔化し通したし。あれも、……。もみ消したよな。確か……)

部長はいつの間にか目を閉じて真剣に指折り数えて考えていた。

(さてよ。……。もしかして、受付の河合ちゃんがひそかにお気に入りなのがばれて、上長の個輪井さんに報告されて、会社内でのセクハラ問題に発展して、女性社員に「セクハラ親父よ。キヤー」とか言われて、社長に「こんなことでは困る」と言われて、マスコミがかぎつけてきて、スキャンダル発覚で週刊誌でたたかれて、レポーターが追いかけてきて……)

部長はもう、冷静な判断力がなくなってしまった。

そのころ待ち合わせ場所に急いでいる彼は彼女との電話がうまく進まない。

「二度目よ。遅刻」 (怒)

「あのお・・・今朝、目覚ましが鳴らなかったんだよ！」

彼が発したこの言葉に、彼女の鬱憤が怒鳴り声に変わった。

「私がプレゼントしたあ？・・・ニコニコくまちゃん時計？」 (怒)

「あれが鳴らなかったのッ！」

「ニコニコくまちゃん時計が・・・そんなわけないわ！」 (怒)

彼女の怒鳴り声に挑発された彼は負けじと声を張り上げていく。

「本当だよ！ ニコニコくまちゃん時計が鳴らなかったの！」 (怒)

「あんた、ニコニコくまちゃん時計気に入ってたでしょ！」 (怒)

「ニコニコくまちゃん時計は気に入ってるよ！」 (怒) (チツ・・・よろしく)

「ニコニコくまちゃん時計を悪く言わないで！」 (怒)

「でも今朝に限って『起きてピョン。』って言わねーんだよ。あいつはーッ」 (怒)

「ニコニコくまちゃん時計のせいにする気！」 (怒)

「ぐ。・・・あいつ」 (チツ・・・こいつ)

「どうせ無意識に消したんでしょ」 (怒)

「・・・」

「もう帰るわよ」 (怒)

「ええー。せつかくの休みなのに」

「私だって忙しいのよ」

「もうすぐだから。とりあえず切るね。・・・ごめん」

「はあぁーあ」（怒）

「ごめん。すぐだから。・・・ね。付いたら説明するから。ごめん」

彼は少しでも早く待ち合わせ場所に行くために運転に集中することにした。彼女のことは気になってはいるが、目の前のニコニコファミリーカーと先に勝負することにした。

「このヨロシク相手だけは、気合を入れなければ勝てない」

彼は悪い流れを断ち切るために、ヨロシクとの自然な離別を自分の運で導けることが出来る可能性に賭けてみることにした。彼は祈るような気持ちでニコニコファミリーカーについて走り続けた。

しばらくすると交差点が見えてきた。

「頼むから右に行くなよ・・・。頼むよ、行くなよ、行くなよ。行くな。・・・ああ行くのかぁー」

交差点では無情にも彼の行きたい方向にニコニコファミリーカーはウインカーを点滅させてくれる。

「何でそっちに行く！　・・・。俺って何かした？ヨロシク！」

彼にはガラス越しのにぎやかそうな子どもたちの笑い声が、至近距離で確認できるのではないかと思えるほど前かがみになっていた。気持ちが前に行けば行くほどにぎやかな様子が伝わり、いらだちをよりいっそうかき立てていくのだった。

しばらく行くと、左手にアパートの駐車場が見えてきた。その駐車場から一台、本道りへ左折しようとしている車が見える。ニコニコファミリーカーはこの車に気づくとスムーズにスピードを緩めていった。この瞬間、接近していた彼は『ハッ』と驚き、急ブレーキを踏んだ。

「アブねー……。何。何なの」

前を見ると、左折しようとしている車に、笑顔で合図を贈っているニコニコ家族のお父さんが見えた。それと同時にこのニコニコファミリーカーの前方のはるか彼方には一台も車らしきものがなく、貸しきり道路のように見晴らしが良い状態にまで改良されてた。

「ガラガラじゃねーかーヨロシク！（怒）……ちょっとは前の車のスピードに合わせろよ！……なー」（怒）

彼はこの車を抜き去ってしまいたい心境だったが、片側一斜線で追い抜き禁止。心も体もヘトヘトに疲れて、未だスツキリ感を味わえないままだ。

「もーいいー！ こいつはどかす」

彼は思い切り接近して、アクセルを空吹かし、パッシングを繰り返した。

「ブーンブーンブーンブーン」

彼は苛立ちで汗まみれになってしまったハンドルを握り締め、アクセルに思いを込めて届けとばかりに踏み倒した。

その頃ニコニコ家族の車中では、宇宙戦士ウルサイナーの曲がかかっている、今日最高の盛り上がりを見せていた。振り付けしながら主題歌を歌っている子どもたちに、手拍子をしている助手席のお母さん。安全運転がモットーのお父さんは、みんなの歌声を聞きながら終始ご機嫌。この幸せな空間にアクセル音やパッシングの様な邪気など入り込めるはずがなく、ニコニコ家族のための時間がゆっくりと流れていた。ただ運がいいのか悪いのか、安全運転がモットーのお父さんの欠点はバックミラーをほとんど見たことがないことだった。

その頃、喧嘩中の夫婦の車はかみ合わない会話がヒートアップ。

「ちょっと聞けよ」

「ブーンブーンブーンブーン」

「聞ってるわよ」

「聞いてないだろ」

「ブーンブーンブーンブーン」

「ごまかす気でしょ」

二人はラジオの音が聞こえないくらいの中を出していたが、前の車のアクセル音は聞こえているよだ。

「ブーンブーンブーンブーン」

「俺は、前の車のことを・・・」

「ブーンブーンブーンブーン」

「前の車って？これ？」

「ブーンブーンブーンブーン」

「あ————、うるさい！」（二人）

二人が前の車を運転している少し気が短い彼に目を向けると、上に跳ねたり、横に揺れたり、肩が震えたりするのが見える。

妻はその彼の様子をしばらく黙って見続けた後、『クスツ』と、笑った。

（あの人、ノリノリねえ。きっとデートに行くのね？）（笑）

主人は少し穏やかになった妻の顔を見て『ホッ』とした。

この後ろのサラリーマンの二人は車内で起きた事件に取り組んでいた。

「お前、誰かから何か聞いているのか？」

「いいえ、何も聞いていないですよ」

「さっき合図に気づいたと言ったじゃないか」

「いえ、合図とは言っていません」

「わかった。合図じゃないにしても、一体どこまで分かっているんだ？」

「いいえ、詳しいことは何も分かっていないんですが・・・」

「じゃあ、なぜ大変なことになったと言いきれるんだ」

前の車の様子を良く見ていたノ一天気な部下が自信たっぷりに半笑いで、

「私は、先を見る目があるんですよ」

『プツン』

部長の線が切れた。

見晴らしのいい先頭のニコニコファミリーカーが少し開けた場所に出た。しばらく行くと左側のほうから本道に出れる小さな道が見える。その道の本道に向かって一台の自転車に乗った女子中学生が上の空で運転していた。彼女にとってこの道は通いなれた道で、アイポットで音楽を聴きながらの運転ですっかり油断していた。お父さんはその彼女の自転車に気づいたが、まさかノンストップで飛び出すとも思えず安心してきっていた。彼女は目の前の本道が近づいていることに気づかない。そのままのスピードで渡り切るかのような姿勢を保ったまま飛び出してきた。

「あっ」

お父さんはとっさにハンドルを切り、彼女を避けようとブレーキを目いっぱい踏み込みこんだ。

「キーーーーー」

その瞬間、彼女はニコニコファミリーカーのことに気づき自転車のブレーキを握り締めハンドルを切った。

「キーーーーー。ガシャン」

彼女は自転車ごと倒れてしまった。

この様子を見て走っていた後ろの少し気が短い彼もブレーキを踏み込み止まった。

またこの後ろの夫婦も見えて、車を止めた。

そのまた後ろの車も止まった。





運よく彼女と車は接触せずに大惨事は避けることが出来た。ニコニコ家族のお父さんがすぐに運転席のドアを開け倒れている彼女に駆け寄ると、

「大丈夫ですか」

「・・・痛っ。痛っ。・・・」

「・・・大丈夫ですか」

お父さんは彼女に手を差し伸べた。後ろのほうでは、運転していた少し気の短い彼が走りよって来るところだ。彼は今までの運転でイライラが募っていたようで、うさ晴らしをするかのごとく、ものすごい勢いで近づいてくる。

その後ろをイライラから開放されたばかりの主人が走りよってきている。

そのまた後ろをノーマルな部下が、何かから逃げるように走り出していた。その後ろを自暴自棄になりかけている部長が血相を変えて、部下を追いかけるように走り出していた。

運よく彼女と車は接触せずに大惨事は避けることが出来た。ニコニコ家族のお父さんがすぐに運転席のドアを開け倒れている彼女に駆け寄ると、

「大丈夫ですか」

「・・・痛っ。痛っ。・・・」

「・・・大丈夫ですか」

お父さんは彼女に手を差し伸べた。後ろのほうでは、運転していた少し気の短い彼が走りよって来るところだ。彼は今までの運転でイライラが募っていたようで、うさ晴らしをするかのごとく、ものすごい勢いで近づいてくる。

その後ろをイライラから開放されたばかりの主人が走りよってきている。

そのまた後ろをノ一天気な部下が、何かから逃げるように走り出していた。その後ろを自暴自棄になりかけている部長が血相を変えて、部下を追いかけるように走り出していた。

ニコニコファミリーカーのお父さんは痛がっている彼女の背中に手を回し、少し体を起こした。

「大丈夫ですか」

変わらず痛がっている彼女を介抱しつつ、自転車を立ててあげた。

その時後ろを走っていた少し気が短い彼が走りこんできてすぐに大声を張り上げた。

「危ないじゃないか！ どうゆう運転してるんだー」

お父さんは『ビクッ』として彼のほうを見た。

次にその後ろを主人が走りこんできた。

「大丈夫ですか？」

主人が気遣う言葉をかけてくれた。

その後ろのほうでは、スーツを着た二人組みがなにやら奇声にも似た声を出して走り回っている。

お父さんは大声を出した彼の方を見てみると、彼は自転車を運転していた彼女の方を見て怒鳴っていたのだった。

「大きい道路に出るときは確認するのが普通だろ！」

彼女は申し訳なさそうにうつむいて、

「ごめんなさい。すみませんでした」

とお辞儀をした。彼女の素直な態度に少し緊張がほぐれた。自転車も壊れてなさそうで、みんな少し『ほっ』とした気持ちになり、なんだか笑顔になっていった。

「まあ、たいした怪我がなくてよかったじゃないですか」

主人が彼女を見ながらやさしく微笑んだ。

「ありがとうございます。気をつけます」

そう言ってくれた彼女にみんなが微笑んで顔を見合わせているかなり後方で、スーツの奇声がこだましている。

みんなは笑顔になったまま、そこで別れて車に戻っていった。

「怖かったね」

助手席のニコニコ家族のお母さんが話しかけてきた。

「ああ。でも若いお兄さんが間に入ってくれて事なきを得たよ。いい青年だった。彼のような物事を冷静に見ることが出来る人が、素晴らしい世の中を作っていくんじゃないのかな」

二人は、この青年がすぐ後ろの運転手だと気づきもせずまた走り出した。

「あ。お父さん。この道左じゃない」

「そうか。左だな」

なれない道での思いつきの様なウインカーと、急ハンドル操作で快調な走りが続けていく。

このニコニコファミリーカーの後は少し気が短い彼の指定席で、相変わらず満喫していた。

「アブねーなー。こんな運転じゃ事故起こすよ、まったく。・・・俺じゃなかったら怒られるよ。ヨロシクちゃん。俺はあんたのガードマンか？・・・ああ、やっぱりそっちに行くんだ」

ストレスを発散したばかりの彼は少し余裕が出来たようでちゃん付けで呼んであげていた。

その後ろの夫婦の車は、またゆっくりと走り出していた。

「大丈夫だったの？」

「うん。自転車の不注意だよ。怪我もなかったみたい」

「良かったね」

主人は前の車を指差しながら話を続けている。

「この車の彼が間に入って仕切ってくれたよ」

「この彼が？・・・やっぱり、テンション高そうだったものね」

(楽しそうにワクワクしていたし。)

「たぶん勢いがついちゃったんだろうな」

(腹立たしくイライラしていたし。)

「なんだか運転が変わったみたいね」

(弾む心を落ち着かせたのね。)

「そんな感じだな」

(鬱憤をぶちまけたんだな。)

二人は細かいことはしゃべらないが会話は成立しているようだ。このまま無事に買い物ができそうな雰囲気が車内で出来上がっていった。

うわさになっている少し気が短い彼は、指定席をキープしたまま赤信号で止まると町並みに目を向け道を歩く人々を見た。ノ一天気な部下をキレた部長が追いかけて走っているスーツ姿の二人が目に入り、

「大変だなあ。みんな時間がなくて」

と、人様に同情できるようになっていた。

そんな自分の携帯が鳴り出した。彼は電話の相手が彼女かどうかを確認もせずマナーモードに切り替えてしまった。

「安全運転しよ」

終わり